

インターバンクの声（2015年2月3日）

2日のニューヨーク市場のドル円相場は、東京市場早朝の116円台オープンを狙いに行くようなドル売りが優勢となっていたが、市場終盤の株式市場の急反発によって再び117円台半ばに戻すことが出来た。それにしても先週末の米第4・四半期GDPの景気減速を示す内容や、昨夜のISM製造業景況指数の結果といい、どうも米経済の成長の勢いが疑わしくなっていることを窺わせる指標が目につくようになってきた。注目されていた12月の個人消費支出も小幅ながら予想を下回り、ロンドン市場からニューヨーク市場に渡る時点でのドル円がもう少し円高レベルであったならば117円を割り込んでもおかしくなかっただろう。これまでは本邦の量的金融緩和による影響や米国の利上げのタイミングなどによるドル買いに焦点が当たって来ていたが、ここに来てドル高の米経済への負の影響が話題になる機会が増えている。まだ相場の転換点を迎えてしまっているわけではないと思うが、神経質な相場局面に入っていることは間違いなさそうだ。どういうわけか、こうした場面でやって来るのが米雇用統計の発表だ。スイスフランショック程にはならないと思うが、想定外に弱い雇用結果なら相場も荒れそうだ。

提供：SBIリクイディティ・マーケット株式会社

お客様は、本レポートに表示されている情報をお客様自身のためにのみご利用するものとし、第三者への提供、再配信を行うこと、独自に加工すること、複写もしくは加工したものを第三者に譲渡または使用させることは出来ません。情報の内容については万全を期しておりますが、その内容を保証するものではありません。また、これらの情報によって生じたいかなる損害についても、当社および本情報提供者は一切の責任を負いません。

本レポートに表示されている事項は、投資一般に関する情報の提供を目的としたものであり、勧誘を目的としたものではありません。投資にあたっての最終判断はお客様ご自身でお願いします。